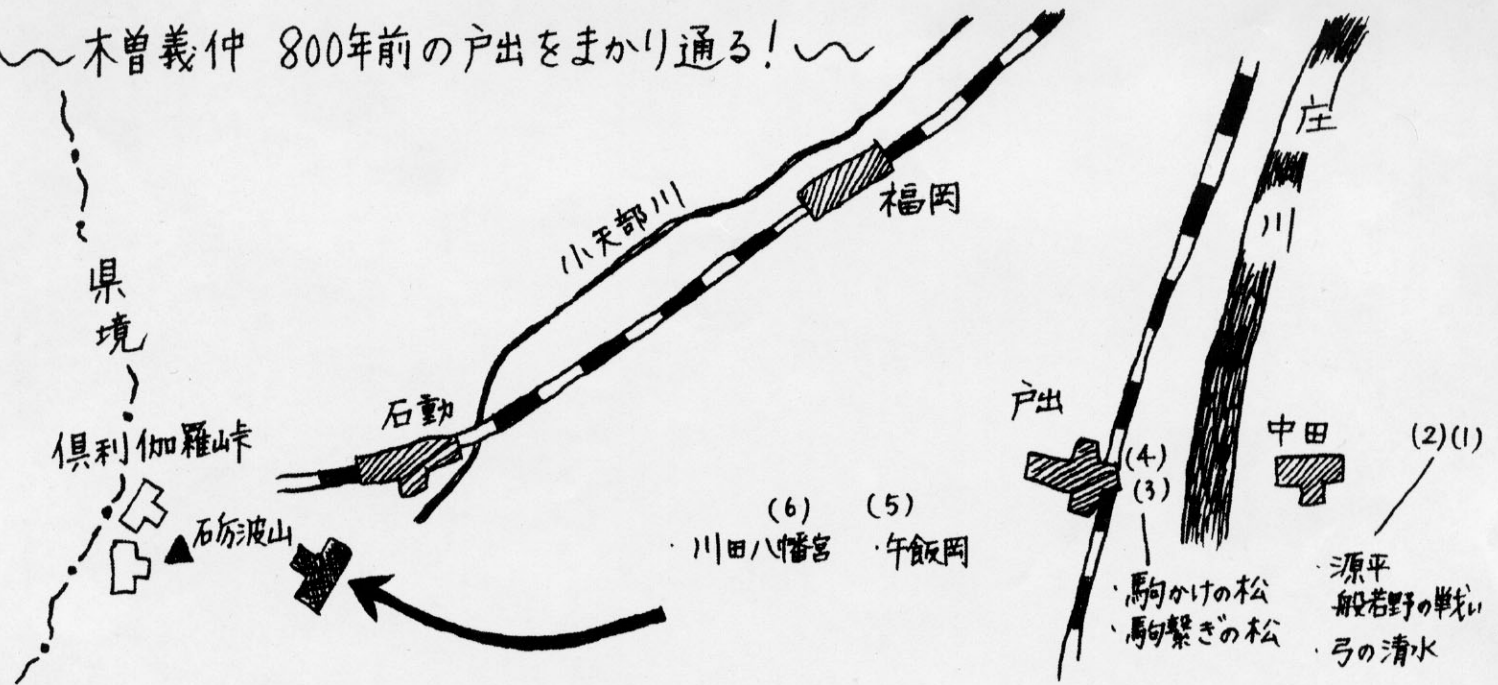


木曾義仲 800年前の戸出をまかり通る!



(1) 源平・般若野の戦い (高岡市常国)

平軍の総大将・平維盛は、越中-越後国境にある寒原の険(現在の親不知付近)で木曾義仲軍を迎え撃つという作戦を立て、越中の地理に詳しい越中前司平盛俊に兵5000を与えて先遣隊として越中へ進軍させようとした。

越後国府にいた木曾義仲はそれを知って、今井兼平に兵6000を与えて先遣隊として越中へ進軍させ、今井兼平は平盛俊より先に越中に入り御服山(現在の呉羽山)に布陣して平軍を迎え撃つ体勢を整えました。

平盛俊は寿永2年(1183)5月8日に加賀から越中へ入り、平盛俊が般若野にまで軍を進めたとき、今井兼平が御服山に布陣していることを知り、その日はそれ以上の進軍を行わず般若野で兵を休めることにしました。

5月8日夕刻。平盛俊が般若野から前進しないことを察知した今井兼平は敵の意表をつく夜襲を決断、闇にまぎれて敵へ接近し、5月9日明け方に攻撃を開始、不意を突かれた平盛俊は善戦しましたが、5月9日午後2時頃に戦況不利となって加賀へ退却しました。

(2) 弓の清水 (ゆみのしょうず) (高岡市常国)

越中浜街道を西進し、六動寺(現在の射水市六渡寺)に宿営していた木曾義仲の本軍は、5月10日に般若野の今井兼平軍に合流しました。

兵たちがあまりに喉の渇きを訴えたため、木曾義仲は地元の農夫である松原大助という男に水はないかと尋ねました。大助は義仲の馬の前にひざまずき「ここに清き水がございます。」と答えました。

木曾義仲は馬を降りて弓を持ち、「私が平家の賊を滅ぼすことができるなら、泉よ、湧き出でよ」と言って弓で地面を掘ったところ、突然そこから清水が湧き出しました。

軍の士気を大いに上げた木曾義仲軍は、5月11日朝、倶利伽羅峠へ向かって般若野を出発しました。

現在当地では、この名水を使った流しそうめんが振舞われています。

(3) 駒かけの松 (高岡市戸出町)

現在の戸出大清水あたりは庄川の伏流水が豊富に湧き出すことから昔から布晒しが盛んに行われていました。

一人の村娘が布を晒していると、急に清水が濁ってせっかく晒した布が泥まみれになってしまいました。見ると、上流を騎馬武者が小川を渡っているではありませんか。力自慢の娘は腹立ち紛れに走りよって、その騎馬武者を馬ごと投げ飛ばしたところ、彼方にあった1本の大きな松の木に引っかかりました。

「駒かけの松」と呼ばれたこの松はもうありませんが、この娘の武勇に心ひかれた木曾義仲が侍女としたのが後の巴御前であると当地方では伝えられてきました。戸出市街にある町名「巴町(ともえまち)」は、この伝説にちなんで名づけられたともいわれています。

(4) 駒繫ぎの松 (高岡市戸出町)

現在の戸出駅東側には、幹回りが2.7m強、地上から1.8mのところまで双幹となった松の大樹があり、進軍途中の木曾義仲が馬を繫いで軍を休めたというので「駒繫ぎの松」と呼ばれていました。

この松は明治42年8月に伐採されてしまいましたが、現在は戸出公園内にこの伝説を遺す石碑が建てられています。

(5) 午飯岡 (ひるがおか)  
(砺波市小島)

木曾義仲軍は砺波市小島の小高い丘で昼食をとったと伝えられてきました。

この丘は「午飯岡」と呼ばれ、明治23年5月には石碑「午飯岡碑記」が建てられています。

(6) 川田八幡宮  
(砺波市高波)

木曾義仲はここで倶利伽羅峠の合戦に臨む前の戦勝を祈願したと伝えられています。

社標には「寿永二年五月木曾義仲が当八幡宮に祈願平惟盛の軍を倶利伽羅峠に夜襲し之を撃破せり」との縁起が書かれています。